
報 告

第六回国際中世哲学会に出席して

小 山 宙 丸

第六回国際中世哲学会は、5年前の前回第五回のマドリッド大会のあとをうけて、1977年8月29日(月)から9月3日(土)まで、西ドイツのボン大学で行われた。この大会に参加したいという申し込みは、40を越える国々から、480名以上にわたったようであるが、実際の参加者は約350名、研究発表者は157名であった。日本の中世哲学会々員の参加は申し込みが24名で、実際の出席者は18名であった。

今回の会の全体のテーマは「中世における言語と認識」であり、それがさらに五つのセッションに分かれていた。第一、言語と論理、第二、言語と科学、第三、言語と形而上学、第四、言語と宗教認識、第五、言語の構造と認識の段階、である。これらの五つの部会が会期中進行すると同時に、並行して国際中世哲学会の中に設けられている八つの研究委員会が随時行われた。それらは、1. テキストの歴史的批判的校訂、2. ラテンの中世におけるアリストテレス註解書、3. イスラムの哲学と科学、4. 中世における科学と哲学の歴史、5. 比較哲学、東と西の思惟、6. トリヴィウム、7. 言語のコンピューター処理と中世文書研究、8. ユダヤ哲学、である。さらにアヴェロエス(イブン・ロシュド)の生誕(1126年生)の850年を記念して、特別の研究会も行われた。

学会の開会行事は8月29日の夕刻5時、ボン大学のオーケストラの演奏するヘンデルの音楽で始まった。続いて国際中世哲学会長の、ボン大学のクルクセン教授のラテン語の開会の言葉があり、ボン大学総長のライス教授、国際哲学会(FISP)の会長のソフィア(ブルガリア)のガノフスキー氏が挨拶した。さらに国際中世哲学会の名誉会長のクリバンスキー教授(モントリオール)のラテン語の挨拶、国際学術協会のルーヴェン大学のフェルベーク教授の、独、仏、英三ヶ国語による巧みな

挨拶、78年8月末デュッセルドルフで行われる国際哲学会を主催するディーマー教授の招待の挨拶などがあつた。それから再びヘンデルの演奏があり、しめくりは会長クルクセン教授の開会講演であつた。クルクセン教授は1973年秋に1ヶ月日本に滞在され、日本の中世哲学会(岡山)で講演され、同時にいくつかの大学などで講演されているので、日本の会員にはすでになじみであり、教授も日本の学会の水準を十分に認めている。この開会講演ははじめパリのヴィニョー教授がなさる予定であつたが、病気のため、クルクセン教授が代りをつとめることになつたものである。この講演の題は「哲学史的中世研究の主要理念と目的設定」で、哲学史研究は、歴史研究であつてもそれにとどまるものではなく、問題は哲学的真理である、という主旨のものであつた。

研究発表は翌30日の火曜から始まつたが、水曜と土曜の午後は行われず、従つて実質四日間で約160、従つて1日約40からの研究発表が行われたことになる。五回あつた午前中二時間半の全体集會が、それぞれ順次に、五部會に割り当てられ、それ以後の時間は五部會、研究委員會等が一齊に並行して行われるというやり方である。従つて詳しい全貌は、(第五回の大會の報告書はまだ出ていないそうであるが、第六回の方は出すということなので、)報告書を見るまでは、把握するのは困難であらう。研究発表の申し込みは全部受けつけたそうであるが、このやり方では発表者が多すぎて5年に一度では無理であらう。もう少し次の大會までの時間を短かくするか、何らかの形で発表者の数を制限しなければならないだらう。(ヨーロッパには、日本の中世哲学會のような各国別の學會は存在しないようである。)発表に使われた言葉は独、仏、英、伊、西である。国別の參加者の数は大づかみだが、地元のドイツ約120、アメリカ、イタリア約40、カナダ、フランス、ポーランド約30、日本、スペイン約20、ベルギー、オランダ、イギリス約10名といったところである。日本を除くアジア方面ではホンコン、フィリッピン、オーストラリア、インド、パキスタンなどから各一名が參加し、ホンコン、インドからの參加者は発表を行い、自分の国の中世哲学に関するものであつた。

日本からの研究発表者は七名で第二日、第三部會で加藤信朗教授が、「アウグスティヌスにおけるトポロギ的表現の形而上学的意義」、第四部會でE・ゲスマン教授が「アベラルドゥスとクレルボーのベルナルドゥスにおける神認識をめぐる論

争の修辭的・教授法的内包」と題して行い、第四日、第三部会で泉治典教授「アンセルムス神学の論理的・対話的構造」、第四部会で長倉久子教授「神のイマゴの神学、キリスト教と仏教の出会いのために」、リーゼンフーバー教授「神の名の構造原理としての分有」、第五日、第五部会で蓮見俊光教授「聖トマス、カント、神における認識理論の比較研究」、第六日、第五部会の全体集会で稲垣良典教授「超越と類比」などの研究発表があった。他に比較哲学の研究委員会で予定されていた井筒俊彦教授が参加されなかったが、ほかの会議でたまたまボンにおいてになった中村元教授が、代りに報告されるというようなことがあった。因みに研究発表の題名に表われた所によって、哲学者別の発表の数をざっとみると、トマス・アクィナス15、ウィリアム・オッカム11、アンセルムス5、アウグスティヌス4、ボナヴェントゥラ、ドゥンス・スコトゥス3などである。

学会の親睦的な行事としては初日の夜、ボン大学総長のレセプション。水曜の午後は三つの方面に分れての遠足で、それぞれ、ライン河舟行、マリア・ラーハ修道院見学、ケルンのドームと博物館見学であった。その夜はケルン大司教ヘフナー枢機卿招待のレセプションがライン州立博物館で行われた。木曜の夜は大学のホールで中世とルネッサンスの民衆音楽の演奏会が行われた。途中でビールやワインの出る楽しい会であった。

金曜の夜は総会で、会長には、他の候補が皆辞退したので、クルクセン教授が無投票で再選された。日本から選ばれる委員には、前委員の松本正夫教授が健康上の理由で辞退されたので、稲垣良典教授が選ばれた。5年後の次回大会開催地には有力な候補としてポーランドのクラカウが残り、しかし種々の問題があるので決定ではなく、引き続き交渉を継続することになった。

以上大きな豊かな学会に対する、大変簡単な貧しい報告である。むこうの学者で日本を知っている人は、日本の水準を認めてくれるが、もっとコンタクトを密にして、国際的な場でもまれるならば、日本の力はいっそう伸びるだろうということを痛感した次第である。そして日本との連絡を一段とよくするようにしたいというのが、多くむこうの教授たちの希望でもあるように思われた。

なお、この大会についての報告を、稲垣良典教授が、日本哲学会の機関誌『哲学』第28号に書かれているので、参照して頂ければ幸いである。